

日野の法界寺と鴨長明のこと



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}
(相模女子大学教授)

取材を兼ねて京都へ行くことが多い。初めて京都へ行ったのは、高校二年の修学旅行のとき。この時は、先生に引率されてのことだから、金閣寺や苔寺を見学したのをかすかに記憶しているものの、どこをどのように見たものかほとんど記憶がない。

京都の日野の法界寺(ほうつかいじ)を訪れたのは、学生時代の春休みであった。私は卒業論文のテーマを鴨長明に

決め、法界寺やその裏手の山の長明が隠遁していた跡地などを訪ねてみたのである。法界寺の住職さんは、本堂の阿弥陀如来像を見せ、そのうえ、私が鴨長明の勉強をしようとしていることを聞いて、寺の什宝ともいうべき長明の木像を見せてくれた。木像は江戸時代に造られたもので、簡素な姿であるものの、私は長明像ということだけでなく感動したのを覚えている。その

あと、法界寺からおよそ五百メートルほどの山中にある方丈石を訪ねてみた。これが自分の意思で行った初めての取材であった。

学生時代から長い歳月が流れ、私は再び法界寺や方丈石を訪れる機会があった。そのときは、方丈石の近くに流れる細い川の水を手で掬って飲んでみた。

この水は、その昔、長明が飲んだものと同じ水質なのではないか。そのよつなことを考えながら掬って飲んだ水は、なんともいとしいものに思われた。

九月初旬(平成十九年)桓武天皇の弟である早良皇太子(崇道天皇)を祀る崇道神社と泰山府君を祀る赤山禅院を訪れた。以前にも崇道神社も赤山禅院も訪れたことがあるのだが、そのときはひどい雨で早々に引き上げたのであった。

崇道天皇に関心があるのは、非業の最期を遂げた天皇が激しい怨霊となつたという点にあり、赤山禅院は陰陽道と深い関係のある泰山府君を祀っているからである。府君は泰山にいる神で、

人間の寿命を司ると信じられている。

面白いのは、崇道神社にはなぜか「崇道神社」といつ石柱が建てられている。「道」ではなく、「導」なのである。宮司さんにそのわけを訊いてみると、「以前からそうなっていて、自分にもよく分からない」という返事が返ってきた。崇道神社の裏山にある小野毛人の墓所にも参拝したが、墓は国宝なので文化庁に移管してあるという。

今度の旅は赤山禅院と崇道神社の取材が目的であった。それを終えた今、久しぶりに法界寺を訪ねてみることにした。今は地下鉄が通り、京都は大層便利になった。以前は途中までバスで行くにせよ、かなりの距離を歩く必要があった。六地藏の駅を上ると、法界寺への方向を示す標識もある。法界寺を訪ねる前に平重衡（しげひら）の墓参をした。

平重衡（清盛の五男）は、南都攻撃のオりの総大将であったが、戦いが夜に及び、灯りを取る意味で民家に火をつけた。それが風におおわれて大きく

燃え上がり、東大寺の大仏が燃え落ち、興福寺も焼き払われてしまった。

やがて、重衡は一の谷の戦いで源氏方に囚われの身となった。鎌倉へ移送されることになったとき、重衡は法然との対面を願った。重衡は「帝や父清盛の命令を受けて、奈良の衆徒の悪行を鎮めるために出かけ、思いがけず伽藍を焼いてしまった。そのおりの大將軍であった私は、その罪業を一身に背負うことになったが、このような自分でも救われる道はないか」と尋ねた。重衡は仏や伽藍を焼いた罰で来世は地獄に墮ちるだろうが、なんとか救われる方法はないものかと法然に訊いたのである。法然は重衡の額に剃刀を当てて、髪の毛を剃る真似をして涙を流しながら戒を授けたという。

重衡は鎌倉に移送され、頼朝の前で堂々と「敵の手にかかって命を失うことは恥ではない。早々に首を刎ねられよ」と述べた。重衡の見事な態度に、梶原景時は「あつぱれ大將軍や」と、感動の涙を流したと、『平家物語』は伝

えている。

やがて重衡は再び奈良へ身柄を移され、木津川のほとりで斬首されることになった。里の人が重衡に柿を差し出すと、それを食べたという。処刑直前に柿を食べた重衡の豪胆さに驚嘆する。関ヶ原の戦いの後、斬に処された石田三成も同じように柿を差し出されたが、「柿は体によくはないから」と言って断つたという。人々はそれを嘲笑したというが、最期の最期まで自分の体をいとおしむ三成の言葉もまた心に残る。

重衡の首は梟首されたが、胴体は法界寺で荼毘に付された。法界寺の近くに墓がある。木津には重衡の首を洗った首洗い池があり、その脇に村人が重衡を憐れんで柿の木を植えた。だが、その木は決して実を付けることはなかったという。

九月、法界寺を訪れたとき、寺僧から、長明の木像を見せてくれた、あの親切な僧は今年（平成十九年）の六月に他界したことを聞かされた。歳月は確実に流れていた。

「深い主題」



志^し村^{むら}栄^{よし}守^{もり}
(評論家)

「伝統が社会的信用を得ていたと思っ
ていた相撲界で起こった死亡事故には、
まさかとばかりに驚かされた。

上の者の気配りがあるのが、これま
での伝統社会の姿のはずだが、はたし
て真相は、と。このニュースの中では、
とりわけあるシーンに心を揺すられた。
亡くなられた十代の人の父親だったと
思うが、こんな意味のことを絞り出す
ように吐露した時だ。「上京させるべき
ではなかったと、今になるとそう思う。
すべて私の責任だ。」

あれ以来、お父さんは悔恨の念で自
らを責めているのだろっかと想像させ

ていただく、人の情の切なさが胸に
迫る。

ところで小林秀雄は、この人間の責
任ということに対して、意外なとい
言葉を通り越して奇怪なと言え、い
わば反動的な言を残している。誰でも
若い時には、極端な表現に走るものだ
が、それにしても…と読む者はたじろ
ぐ。三十代の『断想』から――。

「罪といふものはない、責任といふも
のがあるだけだ、とストリンドベルグ
が何処かで書いてゐた。責任といふも
のすら無いかも知れない。とまれどん
な道徳律でも疑ふ事は出来る。だが不

徳に伴ふ苦痛だけは疑へない。(後略)。
『断想』というタイトルを慮つても、
一見したところでは常識は首をかきげ
る。当然、あつてしかるべき言葉が、
文章の背後に廻っている感がある。小
林が、読者に常に考える余地を残しつ
つ文章を書いた人だ、と知ってはいて
も……。

それはともかくとして、私達はその
生涯のどこかで、自らの行為に悔恨の
念を抱くことがあるものらしい。ここ
ろが、この一種の心理的迷宮をさまよ
う苦悩は経験するが、これを直視して
自らの思想を見直すということを意外
にしないものだ。だからこんなパラドッ
クスは避けて通るのが一般的か。

それにしても、「責任といふものすら
無いかも云々」とは一体、どういっ
とか？私達がよく普通に面接すれば、
そんなひとことが口を突いて出る。つ
まり第一印象はきわめて異様で、良識
が逆撫でされるような不快感がある。
しかし、こんなことを突破口にして、
小林がある思想を言外で訴え掛けてい
るとはすぐわかる。それは続く「不徳
に伴ふ苦痛」ここに集約されているか

らだ。

ここで少し迂回するが、小林はあのドストエフスキイに執拗に肉迫した。なかでも『罪と罰』について『は白眉とも言うべき巨篇だ。』

「ラスコオリニコフといふ人間の創造の由つて来る所以（ゆえん）、罪とは何か罰とは何かといふことの深い主題（以下略）」。

その書き出しのところで「こう書くが、もし世間一般で使われる『罪』と『罰』という言葉が指し示す以外の何かをここに秘めなかつたとしたら、「この深い主題」という表現にはならなかつたらう。ここに既に、何かを予感させるものがある。」

また、小林生前の畏友とされる河上徹太郎は、小林秀雄全集の解説でこう書いている。第三者の言葉で語られるということ、より一般に近い表現と見えるのだらうと思う。

「——それについて小林は『近代、絵画』の中で一言浅らしてゐる。ゴッホはマイシキンの一種だ、と。（中略）前者の狷介（けんかい）（＝意志を曲げない）が自信でもなければ、後者の無抵抗が

人のよさでもなく、しかも共に心の中に嵐を蔵してゐるので、彼等を愛し、その心の中を覗く相手役ある所の、天才は狂死し、ラゴーチン（『白痴』の登場人物）は人殺しになる、といふのだ。」

私達は普通には、善人性を疑うことはまずない。しかし、ここでは明らかにそれが見える。さらに、善良性が社会という機構の中で進化した「責任」までが、『断想』では疑問を以て示された。

ここに小林の最大級のパラドックスがある。小林秀雄的思想とことわつてから書くが、それを決定的に認識したこの瞬間から、その視線を周囲に配すると、それまでは人間の誇るべきことと見えていたものが揺らぎ、別様に見えて、ことの意外な推移にまず驚く。

この「責任」も、人間の誇るべき美德のはずだが、その軽量が微妙に違つて見えるものだ。

しかし、これはなんと良識に背反して見えることか。だとしたら、強烈なパラドックスの姿で世人に訴えるより仕方ないではないか。そんな小林の肺腑の叫喚が耳に届くようだ。ともかく

小林は、生涯にわたつて、このあたりを謎めいた文章にして残してくれた人だ。

ところで最近、若い脳科学者がこう啓発している。謎を解明する時に人間の脳が経験するよい刺激、効果は測り知れないと。小林の文章とひそかに対話する者の心躍る内面が、先端の科学で追認されているようです。さぶる興味深い。

と言つことから再び「不徳に伴ふ苦痛」だが、このまったく平凡に見えるひとことさえ、よく見ればある支点を想定することによって成り立っている。小林の言葉には常にその陰に秘めたものを伴つところが、脳科学者の話と妙に一致して雀躍とさせるのだ。

これがつまり、考える余地を残したという意味なのだ。それはともかく、ロシヤにはさらに先人がいたようだ。

「恐らく、『罪と罰』といふ一つの巨きな思想が理解されたわけではなかつた」（小林同著）。

「深い主題」とは常にそういうものらしい。

「キレル老人」の一人として



桐原良光

(文芸評論家)

最近、ぼくもキレそうになることが
少なくない。職場からの帰り、エレベ
ーターで雑居ビルを降りていて、途中階
で止まると、若い男が中まで乗り込ん
できた。「下」向きだと分かると黙って
そのまま出て行った！昼食後、安いコー
ヒー店で飲み始めたら、すぐ隣のオバ
さんが携帯で話し始めた。大声だから
内容が筒抜けだ。「もうウチはモノでい

っぱいで、いただいても困るの。だ
からどこかへ回してあげて頂戴。ネ、
お願い。ありがとう、ありがとう」。相
手もサルモノ、一度や二度では引き下
がらないらしい。また同じような大声
が周囲に響くのだ。バカらしいことに
だからこんな内容まで覚えてしまった。
本当にキレそうだった。混んだ電車の
中で、足を組んで前に突き出している

男（最近女も…）に腹を立てて蹴飛
ばしてやりたいと思ったことが何度か
あったことだろうか。

六十代ド真ん中のぼくが、キレそう
になるのをようやく抑えているのは
なぜなのだろうか、と考えることがあ
る。喧嘩にでもなり、格闘の末、相手
を殴り殺してしまつて新聞に「容疑者」
として載つてしまつたら？そんな体力
はまず残っていないだろうから、「注意
した老人、逆ギレの若者に殺される」
なんていうことになるのが関の山。あ
るいは、キレル直前に家族の顔がよぎ
るか？いずれにしろ、今のところ何ら
かの歯止めがかかつていて、ぼくは辛
うじてキレル直前で止まっている。と
ころが、キレてしまう老人がとても多
くなっているのだ。

芥川賞作家、藤原智美さんが〇七年
八月に出版した『暴走老人』（文藝春
秋刊）は、キレル老人の実態とその原
因を探った好著。ぼくは、ぼく自身と
周囲の仲間の老人たちに当てはめなが
ら読んでいて、何度も笑い、何度も同

意していた。ぼくたちが子供のころから見ていた老人といえは、ゆったりノンビリと生きているもの、分別のある存在と決まっていたようにも思えたが、どっこい現在はそんなことが許されない状況にあることが分かる。

税務署に確定申告にやっってきた初老の品のよさそうな男性。医療費還付を受けるために用意してきた分厚い領収書の束を係の女性に邪険に扱われた途端にキレて、「アಂತァ！失礼じゃないかっ」と大声で叫んだ。それだけならよくある話かもしれない。男は「お前じゃダメだ。責任者を呼べ」と怒鳴り続け、応援に駆けつけた他の係員のなだめにも納得せず、長々と吠え続けたという。スーパーマーケットでは、七十前後の男が、注文した品が約束の日時に入らなかつたらしく、その連絡もなかつたと店員に延々と詰め寄っており、怒りがいつまでも収まらない。しかし、男がそれ以上にどうしてもらいたいのか、店員たちにもさっぱり分からないようなのだ。ただ文句を言い続

ける老人…。

この本には、その他、老人に限らず病院でキレて薬剤師や医師に殴る蹴るの暴行を振るう患者、さらにキレた末に、本当に殺人事件になってしまった例などが紹介されている。しかも、ハタから見れば些細なこと…。函館市ではスーパーマーケットのタバコ自販機の前で六十歳の男と七十歳の男がタバコの買い方が遅いといったことから喧嘩、殴り合いの果てに、七十歳の男は死んでしまう。居酒屋で客同士の争いから散弾銃を持ち出してきて相手を射殺してしまった埼玉県六十八歳の男。隣家の六十歳の主婦に散弾銃四発を浴びせて射殺した栃木県の六十二歳の男…とキリがない。若者の凶悪犯罪は減っているのに、刑法犯で検挙された高齢者は十六年前の五倍にも達しているところの本が伝えている。

「激変する時代環境では過去の経験則はムダであるばかりか、社会適応への妨げになる。新しいビルを建てるには古い建築物が邪魔になるのと同じ理屈

である」(同書)

新しい時代に打ち捨てられた思いを抱いている老人も少なくないだろう。そして明らかに人生の残り時間は少ない。焦り…、昔なら、老人たちを支えたであろう地域社会も今やほとんど崩壊状態となっている。三、四十年前に誕生した住宅団地では、独居老人たちが目立つようになってきているという。孤立化…。子供のころから個室を与えられて育った世代が次々と社会の主流になる時代で、テリトリー感覚に鋭敏な人間が多くなっているとも。ピリピリ、ピリピリ…。キレる予備軍に不足のないことは、日常の新聞・テレビでご承知の通りだ。

こうした「ライン」を乱す人間が現れた時、私たちは無意識に「敵対者」となっていないだろうか、と筆者は書いている。ぼく自身がキレないように心がけなければならないが、「敵対者」となって、その人物を排除する側に立ち、結果として結局キレることになったのでは始まらない。ムスカシナ…。

日々音無

佐川 毅彦

だだでさえ人づき合いが悪い
こちらから会いにゆく事はほとん
どなく、訪れる人もなし、携帯の無
料通話が毎月六千円分残っている。
たいした用もないので、友人にかけ
る事もない。かかってくる電話は仕
事の依頼か沖繩の実家からの冠婚葬

祭の連絡ぐらいである。仕事の連中
と駅前一杯飲む事もなくなった。
原稿を取りに来るのは三ヶ月に一回
山内さんだけになった。近所つき合
いもなく、子供が小学校の時は親子
でバーベキューか宴会などよくやっ
たものだが、それももうない。



外に出るのは近くのスーパーに魚
かビールを買いにゆくか、ビデオ屋
でホラーを借りるか（相変らずくだ
らんホラーを見てしまっている）あ
るいは図書館にゆくぐらいである。
府中の図書館が新しくなったので
行ってみた。そこはVHSビデオと
DVDも貸してくれる。うれしい事
になんとリタハイワーズのギルダが
あるではないか。すぐ手に取る。そ
してパブリック・アイも見つけた。
これはシューペシが主演のカメラマ
ンとマフィアの話だが共演している
女優が好きでこれも借りる。現在D
VDが一本五百円で売られているの
もあるが、ギルダとパブリック・ア
イは売られているのを見た事がない。
それから三本セット九百八十円と
いうのもでているが、品数が少なく
三本ともすべて気に入ったものはな
かったので買わなかった。
あとは妻と二人で温泉にゆくこと
がある。
もちろん絵を画くのを忘れたワケ
ではない。

人の話を聞かない人たち



片岡義男
(作家)

二、三年前の秋のある日、浅草へいく用事があったので、地下鉄銀座線に僕は乗っていた。神田駅から乗って吊り革につかまり、なを思うでもなくぼんやりとしていたら、僕のすぐ右隣にいたふたりの女性たちの会話が、上野広小路の手前から耳に入り始めた。ふたりとも六十代の東京近郊在住者という雰囲気、着ているもの、ぜんたいの印象、喋りかたなど、庶民の見本のような感じだ。

い相つちを打ちながら、聞き役にまわっていた。「贈り物だから品物はあたりさわりのない物でいいんだけど、どこから送ればいいのか、それがやっかいで頭が痛いよ。近所のスーパーから発送するわけにもいかないし」「デパートからおったデパートね。そうなのよ。この電車で反対の方向へちよつといったところに、サンエツマエという駅がある、そこで降りるとサンエツという有名なデパートのなかなのよ。そこで贈るのがいちばん無難だからと言われて、今度からそうしようと思うけど、出てくると言っても電車を三本乗り換えて

二時間でしよう」「電話で送れるという話を聞いたけれどねえ」と軽く受け流す相手に対して、なぜこうも返礼に物を贈る事情が重なるのかいくら考えてもわからない、などと言いつつふたりは上野駅で降りていった。

サンエツとは、まず間違いない、三越だ。ずっと以前から彼女は三越のことをサンエツと言ってきたのではないが。三越はミツコシと読むよりサンエツと読むほうが無理がない。近所に丸越という店でもあれば、そこからの横滑りで三越はなんの疑いもなくサンエツとなる。それはそれでいいとしても、相手の女性が、サンエツではなくてミツコシでしょう、と訂正しなかったことを僕は不思議に思う。彼女も三越はサンエツの人なのだろうか。それとも相手の言うことをろくに聞いてはいないから、サンエツという間違いに気がつかなかったのだろうか。

ほぼおなじ頃、地下鉄丸の内線にお茶の水駅から乗って座席にすわった僕の耳に、隣にすわっていた中年女性ふ

たりの会話が、届き始めた。僕のすぐ隣の女性が相手に喋っていたのは、東京へ出て来た帰りに池袋で買い物をしていこうと思いいニシタケに入ったら、どこになにかあるのかわかんせんわからず、最後は出口も見つからなくて迷子になった、という話だった。

ニシタケとは西武だ。これもさきほどの三越とおなじく、武豊という人命をタケ・ユタカと読むように、西武はセイブではなくニシタケと読むだろうが、無理がないような気がする。それにしても、これまでずっとニシタケと書いていて、訂正してくれる人はいなかったのだろうか。連れの女性が興味なさそうに、ふんふんと聞き流していた様子は、西武がニシタケのままであり続けたことの謎と、どこがでつながっているように僕は思う。彼女がニシタケと言っているとき、それを聞いて受けとめていたはずのすべての人が、じつはただ聞き流しているだけだった、というようなかたちで。

そしてごく最近、小田急線の電車の

なかで、コダワラという地名を僕は聞いた。五十年代なかばとおぼしき年齢の女性ふたり連れのうちのひとりが、親しい知人の娘が嫁ぎ先のコダワラで親族の人間関係に悩んでいる、という話をしていた。僕の聞き違いかと思いい、しばらく注意して聞いていたのだが、その女性は確かにコダワラと言っていた。真鶴や熱海といった地名も話のなかに出ていたから、コダワラが小田原であることはまず間違いない。

小田原はオダワラと読むのだと、人から正式に教えられて覚える体験は、中学校の日本史の授業で一回かせいぜい二回だろう。それを逃がしてしまつと、日常生活のなかでいるんな人とさまざまな話のやりとりのなかで、小田原はコダワラではなくオダワラなのだ、偶然にもいつのまにか、覚えていくほかない。人との話のなかで、小田原がオダワラという音声で出てきたことは、彼女の生活のなかで何度かあったはずだ。親しい知人の娘の嫁ぎ先が小田原なのだから、その知人は話のな

かで何度も、オダワラと言ったはずだ。

サンエツ、ニシタケ、そしてコダワラをめぐる以上のような話を、世間話の一部分として知り合いの新聞記者にしたら、そういう人たちは人の話を聞いてないんですよ、という分析が返ってきた。三越にしろ小田原にしろ、ミツコシそしてオダワラとして、何度となく人の口から音声として聞いているはずなのに、音として耳に届いてはいても、それをきちんと受けとめて知覚し、自分の間違いを訂正するという頭のなかの作業をしないのです、間違いを聞かされるほうの人にもおなじことが言えます、と新聞記者は言い、「そういう人たちがどこにでもたくさんいて、しかもどんどん増えています」と、つけ加えた。

サンエツやニシタケは後日の課題にするとして、外出するときはいつもまず小田急線の電車に乗る僕は、これからはオダキユウではなくコダキユウと言う人になってみようか。

母の三原則



片岡義男 (作家)

あなたのお母さんに関してもつとも印象に残っていることはなにですか、とごく最近、人に訊かれた。尋問の雰囲気をかすかに感じさせるような、きわめて真面目な質問のしかただった。母親その人のものとしての、もっとも強く特徴的だったのは関西弁でした、と僕は答えた。そのとおりだからだ。

僕が知っている母親は、なにか意図があつて東京の山の手言葉を喋るとき以外は、その一生をとおして強烈な関西弁の人だった。僕の母親は近江八幡で生まれた。昔から続いた地元では知られた数珠屋の末娘だ。その数珠屋の始まりは、例によつてと言うべきか、聖徳太子が地場

産業の重要性を人々に説いてまわった時代までさかのぼるといふ。母親が二十代の頃からその家は傾き始め、彼女が自分の母親の葬式を自分で盛大に出したところで、家は完全に倒れた。母親の父親はそれより少し前に亡くなっていた。

近江八幡の言葉は母親の母国語だった。単なる関西弁のひとつではなく、母国語としての近江言葉だ。家が傾いていくのを目のあたりにしながら自立の意欲に目覚めた母親は、当時の女性にとつてもつとも確かな、そしてほぼ唯一であつたはずの自立の道として、学校の先生になることを選んだ。師範学校は奈良だからそこで奈良の言葉を身につけ、いまで言うアルバイトで教授の秘書のような仕事をして京都で忙しく過ごし、京言葉をかなりのところまで会得したようだ。かなりのところまで、と母親の没後十数年のいまでも僕が言つのは、京言葉には自信がなかつたように僕は感じていたからだ。京都の人として都に暮らした体験はないし、

性格が京都の人ではなかった。そのかわり大阪弁は小気味よく多彩に堪能だった。大阪弁には大きく分けて五とおりあると言い、使いわけてみせるのを隠し芸のようにしていた。母親が自分との親和性をもっとも感じていたのは河内弁だったようだ。

このように根っからの関西言葉の人だった母親だが、息子の僕は言葉が関西ふうになるといっような影響を、まったく受けていない。母親の関西弁が僕に伝染することはいつさいなかった。僕は東京言葉の東京の坊やであり、五歳から十年近くを山口県と広島県で過ごしながら、どちらの方言に染まることもなく、東京言葉でおした。身も心もその核心の部分においては、五歳までに僕は出来上がっていたからだろう。

言葉の表面においては母親の影響を受けてはいないが、母親が自分の言葉に託した人生の原則のようなものは、僕をいまの僕へと導いていくにあたって、決定的と言っていい力を発揮した。

人生の原則とは、母親がもっとも頻繁に口にしてきたものを三つだけあげると、「かまへん、かまへん」「あほくさ」「そして「やめとき、やめとき」の三つだった。これを僕は「母の三原則」と呼んでいる。

小学校で一学期が終わり、僕は通信簿をもらって自宅へ帰る。母親に見せる前に、「僕の成績は悪いですよ」と、断ると、「かまへんかまへん」と母は言う。「父兄が感想を書いて捺印する箇所があります」と言う僕に対する母親の反応は、「あほくさ」「のひと言だ。」「成績が下から五番目までの生徒は、休みのあいだに補習授業を受けるのです」と、下から三番目の僕が言うくと、母は「やめとき、やめとき」と答える。

母親の声による関西弁の言いかたで、この「母の三原則」は、幼い僕の五臓六腑にあますところなく浸透したはずだ。勉強の出来ない男の子供にとって、これほどおおらかに気持ちを楽しませる母親は、ほかにいないだろう。少なくとも僕が小学生のあいだは、母親は

ずっとこうだったから、学校の勉強だけではなく、あらゆる領域で登場した「母の三原則」は、それを母親が僕に向けて口にするたびに、僕の内部へ深く入り込み、そこにどまることがなかった。

そしてそれはそれ以後の時間のなかで発酵を積み重ねていき、そのときどきの発酵具合が段階的に、僕という人の気質を作って現在にいたっている。発酵はもうそろそろ終わったかというところ、けっしてそんなことはなく、いまでも僕の内部でぶつぶつと続いている。

内面においてこれだけ端的に、しかも深く長続きする性質の影響を、僕は母親の関西弁をとおして受けとめたから、おそらくそれゆえに、表面的に母親に似て言葉が関西ふうとなり、「せやなあ、そらええわあ、ほなそうしょ」などと喋る人になることは、絶対と断言していいほどにあり得ないことだったのだ、という理屈を作って僕は自分を納得させている。

ウィーンに呼ばれてゐるアート



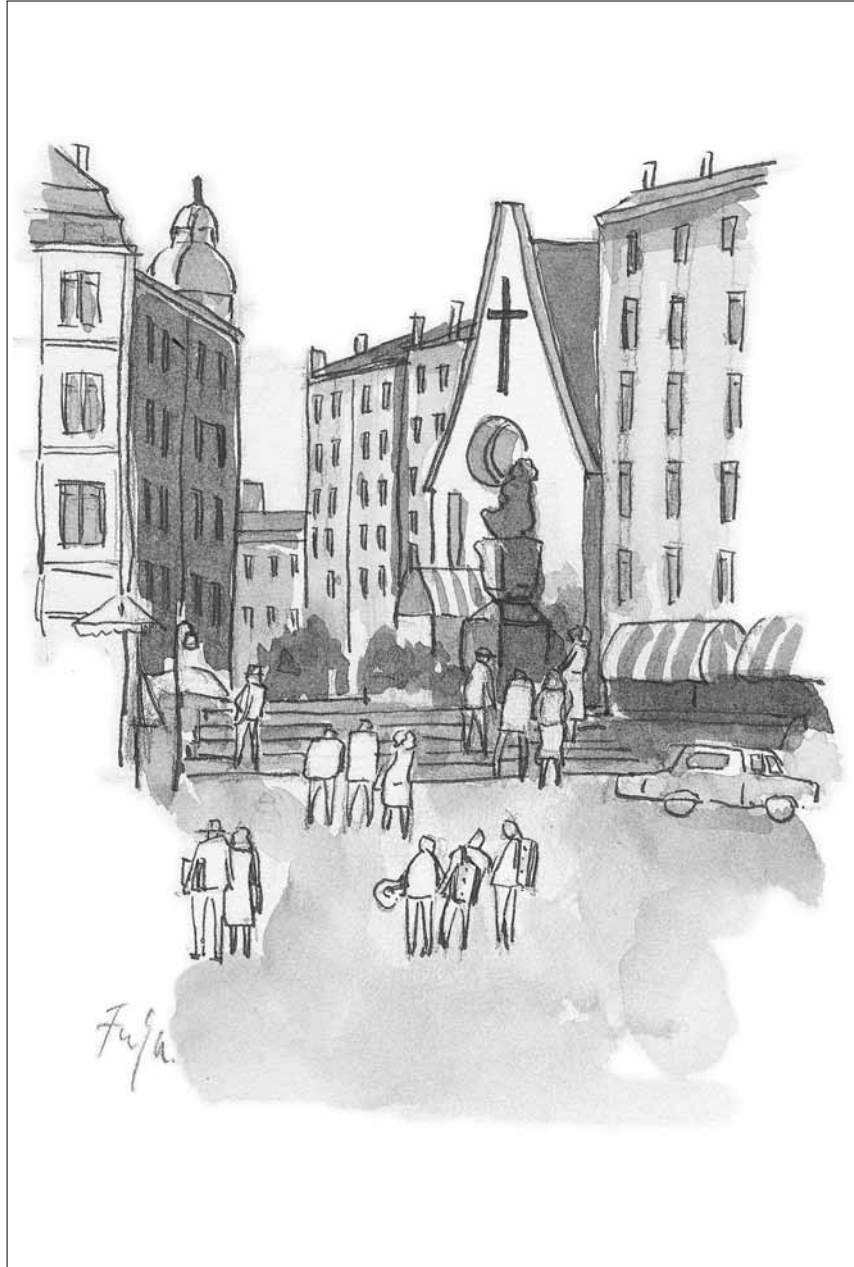
さかもと ぶ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)

二〇一五、六年、毎年ウィーンに出かけている。ウィーンに呼ばれているのだらう。この「呼ばれている」という表現は、瀬戸内寂聴さんが使っておられた表現で、「インドにはね、呼ばれているヒトと、呼ばれないヒトがあるの、何度か訪れることになるのは、呼ばれてにいるヒトなの、私は呼ばれている

ヒトなのよ」
要約するとインドに深い縁があったということになるのだらう。
私も同じようにウィーンに「縁があり、二〇〇三から、一年置きに展覧会が出来るのも、ギャラリーのオーナーが気に入ってくれたことにもよるが、ウィーンの人々にも受け入れてもらえ

たということにもなるのだらう。引き続き、二〇〇九年も展覧会をすることになり、四回目となる。この年は、日本におけるオーストリア年に当たる。
芸術の街ウィーンは伝統を重んじる中にも、新しいものも受け入れてくれるところでもあり、国民の芸術への関心度も高い。



ある回想



永岡 慶之助
(作家)

中秋の一日、横浜の娘夫婦があらわれて、これから軽井沢のアウトレットを冷やかして来るといふ。これは昔は無かった施設で、手頃な値段で購められる一種の名店街のようなものだが、店のレイアウトも瀟洒なところから、近頃では同別荘地の新しい観光スポットとして、若者たちで季節に変わりなく賑わっているらしい。

聞いて私は、ふと思いついて、ならば帰路には車をちよつと廻し、今評判

の官営富岡製糸場を見学してはどうかと提案した。今評判とは、群馬県富岡市の旧官営製糸場が、文化庁選定の世界遺産暫定リストに登録されて以来、見学者が爆発的に増えたため、市当局が急遽、駐車場の拡張や、案内、解説のボランティアを募集するやで大わらわの模様、との記事が新聞紙上を賑わしていたからだ。

娘夫婦の車を見送りながら、私の胸中には感慨深いものがあった。実は若

き日、私は富岡製糸場を舞台にして小説『紅葉山・富岡製糸場始末』を上梓、はからずも第六十二回直木賞候補に推されたことがあったのである。

茫々と脳裏に浮かびあがるのは、表門を入ると突き当りにある赤煉瓦造りの東籬倉庫には、アーチ型入口に、「明治五年」の文字が刻まれていたことや、果てが見えないほどの長大な大建築物…そして雑誌連載に先立ち、挿画担当の中一弥画伯と取材に訪れた際のあれこれであった。

当時は、私企業が現実に操業しているため、自由な見学は許されていなかったが、特別に許可されて場内をくまなく取材させて戴くことが出来た。お雇いフランス人技術者の名をとったコロシアム風の事務所ブリュナ館、初代所長尾高惇忠の書を掲げた部屋の暖炉、あるいは場内の一角に据えられた巨大な「鉄水槽」、これは幕末に、例の勘定奉行小栗上野介が剋始した横須賀製鉄所作成になるものだ。

ところで初代所長の尾高惇忠は、武

州の豪農洪沢一族である名主の子だが幼少の頃から学問好きで、思想的に水戸学の影響を色濃くうけており、後年日本の代表的実業家となり男爵となった洪沢栄一が、じつは八歳のときから、尾高から学問の手ほどきをつけ、

「私が最初におそわったのが論語で、それから孟子、いわゆる四書五経、小学をあげていって、さらに文選、史記……」

と当時を述懐している。

ところが、幕末の熱い時代が、尾高惇忠、洪沢喜作、栄一ら三人の従兄弟らを、とてつもない行動に走らせた。あることが同志を募って上州高崎八万石安藤右京亮の城乗っ取りと、横浜外人館の焼討ちを企てたが失敗した。

尾高は岡部藩に逮捕投獄され、喜作と栄一は京都へ逃れて一橋家の用人平岡田四郎を頼った。

人生の面白さは、栄一は將軍徳川慶喜の弟昭武十四歳に随行して遠くパリ万国博覧会に赴き、喜作は洪沢成一郎と名乗って彰義隊頭となり、更に意見

の相違から上野の山を脱出して振武軍を編成、飯能戦争に敗れて、榎本武揚の箱館戦争に参加、降伏して武揚や大島圭介らと投獄の憂き目を見た。

その彼らが明治五年には、尾高が官営富岡製糸場の所長となっており、洪沢成一郎は喜作の名に戻って七等出仕として尾高所長の配下となっていた。

幕府崩壊と知って欧州から急ぎ帰朝した栄一は、大蔵省租税正に抜擢されたが、その建築によって官営富岡製糸場が創設されたため、はからずも尾高惇忠、洪沢喜作の二人が起用されたのだ。

コチコチの攘夷派が一転して、時代の最先端をになうヨーロッパ式製糸場建設に心を傾けたのは、人生の妙、ここに尽きるというほかはない。

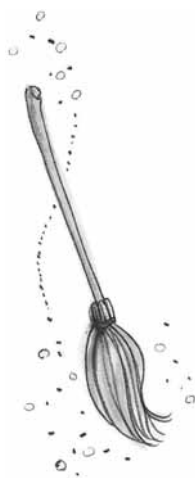
ところが、私の「製糸場始末」の連載が終りに近くなつて、思わぬ人から食事の招待があった。日本伝研時代、野口英世博士と同僚だったという老博士とのこと、見当もつかず首をひねったが、とにかく編集長と同行して赴き馳走にあずかった。ところが食事中の

会話で、だんだん私は当惑した。わが家をモデルにして有難う、と老博士が申されたからである。上州屋なる屋号も暖簾の回案もわが生家のものであり、最初に出てくる寺の境内では、子供の頃よく遊んだものです、と感慨に耐えぬといった御様子なのだ。

寺の境内はともかく、上州屋というのは私の創作であり、暖簾の図案は中画伯が想像で描かれたもの。第一、老博士の御出身地は、同じ上州でもかなり離れた町なのだ。私は老博士の思い違いを訂正しようとした。すると編集長がそつと私の袖を引き、目顔で止せというので、危うく声をのんだ。「博士が折角よろこんでおいでるのですから」とは、帰路での編集長の述懐であった。

娘夫婦が帰って来た夕景、「いやあ、製糸場は、大変な見学者で、数十人単位で人を分けて案内し、解説するボランティアの方も御苦労さまですわ」と報告した。私の富岡製糸場の回想も、賑やかな娘たちの話声でもって、終りを告げた次第。

はな



山本千明 (ECC英会話講師)

物心ついた頃からなんとなく気にはなっていた。自分では見えないものだから意識しなければ済む些細なことである。ただ周りの親切な人達が指摘してくれるので認めざるをえないのだ。まずは最も身近な母親の一言「お前が生まれた時、兄ちゃんが言ったんや。この赤ちゃん、お鼻が大きい！って」悪気の欠片も無い。愛情たっぷりに微笑みながらの誕生秘話である。顔をし

かめて水を差す訳にもいかない。幼い頃から失礼な兄だが、言論の自由は与えなければならぬ。普通に筋の通った鼻をもらっている兄に将来それを聞いた妹の感情など知る由もないだろう。父親が典型的な鷹鼻で「お父さんにまつつくつい(瓜二つ)やねえ！」と言われる度に顔の中央を隠したくなつた。さりとて団子系の母親に似れば済む問題でもなかったがなぜ兄達だけが

うまく足して二で割った形になったのか、六才にしてこの世の不条理を知る羽目となる。ただ初めての女の子ということも幸いしてか家族の愛情はたっぷりといただいて暗い性格にはならずに大きくなれた。

思春期にそれは突然やってきた。ある日じつと私の顔を見て高校時代のクラスメイトがきっぱり言い切ったのだ。「魔女の鼻だ！」笑ってその場を逃れたが心の中で窓ガラスがピンツと割れる音がした。返すくくも思春期である。おかげで「花も恥じらう十五の乙女」は「鼻を恥じらう乙女」になってしまったのだ。風邪をひいてマスクをした時だけ、鏡に映る自分の顔が許せる気がした。横顔の写真など撮られたら最悪な気分になるので、カメラを向けられると反射的にキツと正面を向く癖がついた。熱湯に漬けて叩いて落とそうとまでは思わなかったができればずっと風邪をひいていたい心境であった。大人になつてからは人を捕まえて魔女呼ばわりする輩もおらず、鼻への意識も

次第に分散していったかに見えた。そのうちマスク無しでも結婚を申し込んでくれる奇妙な男性も現れてめでたく「角」だけ隠して嫁入りさせていた。平穩無事な生活に過去の小さな傷を突きに来る者も無くコンプレックスから開放されたよつな日々だったが、やがて長女が生まれ出て対面した瞬間にその「小さなお鼻」にこっそりと胸を撫おろした自分が居た。

それから二十年。転機は突如訪れた。とある福祉の講演会での会場。前列でせつせとメモを取りつつ聞いていた。終了直後ふいに背後から私の旧姓を呼ぶ声がした。振り返るとそこには二十年振りの同僚の笑顔。「いやあー久し振り！」と喜びながらも一つの疑問。ずつと斜め後方に座っていたという彼女。いつどつして私だと気付いたのか。「鼻で分かった」久々の直球、ど真ん中である。しかし何故か一つも嫌な気がしなかった。しばし近況報告をして「またね」と別れたが、その後雲が晴れるように目の前が明るくなった。「こいつ

のおかげだったのか」と妙に納得。昔から頻繁に出先で声を掛けられる。私と一度か二度会っただけという人が迷う事なく近付いてくるのだ。こちらはほとんど覚えていないので世間の人達の記憶力の良さに痛み入るばかりであった。でもそれがきつかけとなり連絡を取り合う間に出会いが広がって人の輪が強く大きくなっていく。様々な個性・知識・情報に助けられ、私の人生も豊かに鮮やかに彩られてきた。思いがけない人達との「袖摺り合う」縁もガツチリつかんで引いてくれていたのは他でもないこの鼻だったのだ。アメリカの自由の女神がフランスのエッフェル塔か、とにかくそれがどの国なのか、それさえ見れば一目瞭然、誰にでも分かるシンボリック存在、それが私のこの鼻らしい。ありがたやありがたや。恨むどころかハワイ四泊五日ペア宿泊券を差し上げたい気分である。この歳になつてやっと気がついた。人気グループSMAPのヒット曲がいつの間にか一部変換され、鏡の中の自分がこちら

に向かって歌いかけてくれる今日この頃である。「世界に一つだけの鼻」に敬礼。

